



TITLE:

随想

AUTHOR(S):

市川, 篤二

---

CITATION:

市川, 篤二. 随想. 泌尿器科紀要 1956, 2(4): 181-182

ISSUE DATE:

1956-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111141>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 2 卷 第 4 号

昭和 31 年 7 月

## 随 想

東京大学教授 市 川 篤 二

### 日 本 医 師 会 の こ と

1956年の春は我々泌尿器科専門の者の大部分は年次総会が7月という関係上比較的のんびりできたはずであつたが、筆者は誠に不運(?)にも慌しい数日間を送つてしまつた。というのは日本医師会の役員選挙があつたからである。医育機関に属する我々は研究と教育が先ず第一と信じて今日まで暮して来たし、この信念は今もお正しいと考えているが、筆者は偶々1955年の10月末から日本医師会の常任理事に選出され、日本医師会の学術面の仕事することになつたのである。日本医師会——これを略して日医という——では日本医学会を何と略称するかというと、日医という略称も甚だ曖昧なことになるが——の学術面というと、とりもなおさず日本医学会が大きな役割を演じているが、日医内の平生の仕事として日本医師会雑誌をはじめ各種治療指針の発行、放送の委員会、図書委員会、補修講座の講師の依頼など楽屋裏的な仕事が相当にある。

然し筆者の就任後、日医の最大の仕事は所謂新医療費大系案及び健康保険法改正案と取組むことであつた。研究中の医師の大部分はまず保険診療の詳細について知らないといつても過言ではなからう。極言すれば無関心に近い者が多いだろう。筆者も正にその部類に属していた。それがこんな難問題の山積している時期に日医の役員ということになつたのだから、見方によつては正に噴飯ものであらう。然し門前どころか門内の小僧となつてみれば、経を読まねばならないという次第。筆者は今以て経が読めると高言はできないが、数カ月の勉強で経の精神だけは理解したつもりである。

そこで考えることは学会というものは飽くまで学問中心でよい、少しでも政治と関係あることは敬遠すべきであるという態度で終始すべきであるか否かということである。

新医療費体系案が一応棚上げになつたのについて、日本医学会の声明——これは医学会長が医師会長に答申するという形式で行われた——が大きな影響を与えたことは事実である。かれこれ考えてみると学会としても、少く共医学を基礎とした技術の価値判断について、発言できるだけの準備はしておきたいように思われる。こんなことについて本年札幌の総会乃至評議員会で意見を交換してみたい。

どなたも御承知のことと信ずるが、上にものべたように日本医学会と日本医師会是一身同体とでもいうべき関係にあり、我々の大部分が属している日本泌尿器科学会は日本医学会

の一分科であるのだが、他の分科会と同様我が泌尿器科学会も日本医師会に対する場合と、日本医学会に対する場合とではかなりちがったものを感じるの一人筆者ばかりではなからう。然しこれではいけないというのが目下筆者の脳裏にある所感である。

### 専門医制度と新制大学院

或る科目について練達の医師をつくるのが専門医制度のねらいであり、将来研究者またその指導者を養成するためにつくられた新しい学校が新制大学院である。“博士の称号を得るためには新制大学院で勉強するのが当然である。医学士となるためにさえ4年間の学部教育を課しているのに、その上の称号である医学博士となるためにスクーリングなしでどうしてすまされようか”というのが新制大学院の設けられた理由であるときいている。

新制大学院については既に学校教育法で制定され1955年から発足しているが、専門医制度はこれからつくられようとしている。学会の評議員各位が未決定のこの問題に深い関心をもたれて意見を發表されんことを、また評議員でない会員各位も評議員を通じて意見をのべられること切望して止まない

筆者の如き医育機関に属するものは確かに研究上の指導的立場に立たねばならないが、制度の制定などということに対してまで指導的能力をもつと誤信してはならないと常に自ら戒めている。広い活きた社会をみておられる会員諸兄の強い御協力を願う所以は実にここにあるのである。

### 本誌のこと

最後に憎まれ口を一つ。稲田教授の御努力で本誌がうまれたことに、筆者も敬意を表することに各かではない。然しながら学会雑誌と同型の雑誌が果していくつも必要であろうか？学会雑誌に投稿してもなかなか印刷されないからこういう新しいものがあつても差支えない。否必要であるという論者もあるかも知れない。然し考えてみると若し学会雑誌での發表が遅れるというならば、それは学会雑誌の頁数が少いからであり、頁数の少いのは学会の財政が貧弱だからである。学会雑誌は研究發表のみと規定もしていないし、症例報告を拒否するとも規定していない。成程今筆者が書いているような“随想”などは学会雑誌は現在取扱っていないが、学会の経済が豊かになつて雑誌が部厚くなり、会員の希望が多くなれば、会員の雑誌である学会雑誌の編集方針は当然変更されるべきものである。

筆者が本誌に望みたいのは学会雑誌と同型のものでなく、かの“Urological Survey”の如きものに変ることである。現在日本の泌尿器科医は購読料を支払はねばならない同型の専門関係の雑誌がいくつもあつて閉口しているのが実状ではなからうか？米、英、独、仏にはこのような現象はないように見えるが、イタリーではいくつかの雑誌が發行されていて、筆者と同じような意見をはいたイタリーの学者があつた。それは1955年春、筆者訪伊のときの経験である。